

The Shimonoseki City University Public Relations

下関市立大学広報



海峡の英知。未来へ そして世界へ。

公立大学法人

下関市立大学

Shimonoseki City University

2018年11月1日 第86号

発行：下関市立大学広報委員会

〒751-8510 下関市大学町2-1-1

TEL.083-252-0288

FAX.083-252-8099

<http://www.shimonoseki-cu.ac.jp/>

第57回下関市立大学「馬関祭」～維新前進～

新しい挑戦を!!

大学祭実行委員長 国際商学科3年 轟木 康陽
(福岡県立香住丘高等学校出身)



私たち下関市立大学大学祭実行委員会は、大学祭「馬関祭」を企画・運営する組織です。規模は非常に大きく、委員数は200名を超えます。1年次から3年次までの個性あふれる私たち実行委員の活動は、馬関祭の企画・運営に留まらず、下関市内の地域のボランティア活動にも積極的に参加しています。私はこの1年間、大学祭実行委員会の委員長として、先帝祭や関門海峡花火大会、馬関まつりなどの下関を代表する祭りや様々な地域ボランティア、各イベントの準備に携わってきました。それらを通して私たち実行委員は思い出を、絆を、それだけではなくイベントの企画・運営のノウハウや、地域の方々との深いつながりを得て、馬関祭の開催へと向かいました。私達が参加しているボランティア活動に、数十年前から代を重ねて参加している団体もあり、そのような方々と私たちとのつながりは特に深いと感じています。このような気さくに迎えてくれる環境は、まるで自分が下関で生まれ育ったかのように感じさせてくれます。

また、大学祭実行委員会は新生を受け入れる体制を整えています。入学式の際には、初めて下関に来る新生のために無料で「ふく鍋」をふるまい、さらに、参加者を募って新生歓迎会として、

角島にも行きました。角島は、唐戸市場と並ぶ下関の観光名所で今年も大変好評でした。入学された際にはぜひ、ふく鍋を食べて角島に行く企画に参加してみてください。

さて、平成30年度の馬関祭は10月7・8日に行われました。メインテーマに「維新前進」を掲げ、明治維新150周年を下関市の大学として共に祝いました。各サークルの出店の内容も今年は瓦そばや長州サイダーなど、山口県を感じていただけるものとなりました。初日に予定していた6日は台風の為中止となってしまいましたが、7・8日の2日間で5,000人を超えるお客様にご来場いただき、数多くのお褒めの言葉を頂きました。3日間で予定していたスケジュールを2日間で執り行うということは非常に大変でしたが、大変さを上回る「楽しさ」がありました。

大学生活は、自分の身を置く環境、志、行動をする勇気を出せるか、で大きく変わってくると思います。私はこの大学祭実行委員会に所属し、委員長として1年間尽力できたことを誇らしく思います。是非皆さんも大学生になった際には、新しい挑戦を行い、意義のある大学生活を送っていただきたいと思います。



就職支援

変わりゆく就活環境への対応

教授 柳 純
(キャリア委員長)

企業等の新卒採用動向が「前倒し」傾向にある中で、今年9月初旬に経団連の会長が「就活ルール」撤廃について言及しました。報道では早ければ2021年採用予定の現大学2年生が影響を受けるとの情報が流れており、就活生を取り巻く環境変化を注視する必要があります。

さて、今年3月に卒業した学生(2017年度)の就職決定率は98.6%(2018年5月1日現在)となり、昨年の99.8%からはややポイントを下げましたが、依然として高い数値を保っています。大学の評価指標の1つでもある「就職力」は、学生の皆さんの就職活動の成果であると考えています。

本学では、キャリアセンターを中心に「キャリア教育」を推進しており、学生の皆さんの4年間で体系的に「キャリアサポート」できる体制を整えています。例えば、就職相談から始まり、エントリーシートの添削指導、就職に向けたスキルアップとしての面接訓練など多岐にわたります。

最後に3年生の皆さんにおいては、自らの就職先や進路先をこの先約半年から1年で選択・決定しなければなりません。キャリア形成は生涯を通じて行われるものですから、将来を見据えて、「現時点で何をすべきか」、「今何ができるのか」をしっかりと考えて、就職活動に臨んでいただきたいと思います。

香川県庁に内定

国際商学科4年 俵 悠登
(高松県立高松北高等学校出身)

一人暮らし、アルバイト、サークル活動と充実した大学生活を送っていた私。こんな毎日が一生続くと良いのに、と思っていました。気づけば大学生活も残り半分、そろそろ何かしないといけない、と気持ちを切り替えたのが大学3年の時でした。

私は公務員志望だったので筆記対策を開始し、合間に民間企業の研究や自己分析を行いました。正直、勉強は大変で辛く、挫折も何度も味わい、逃げ出したい気持ちになりました。しかし将来、香川県職員として勤務している自分をイメージして毎日コツコツと勉強できたことが合格という結果につながったと思います。公務員志望でない方も、本当にやりたい仕事に就くために日々の努力が必要です。大学生である今の時期は、社会人としてのスタートの準備期間です。良いスタートを切れるように一日一日を大切に、「何になりたいのか」、「何をしたいのか」を考え、自分自身ときちんと向き合ってください。

人生において「今」は一度だけです。「今」できることを一生懸命に取り組み、悔いのない大学生活を送っていただきたいと思います。応援しています。

株式会社ゼンリンに内定

経済学科4年 吉長 美紗
(広島文教女子大学附属高等学校出身)

就職活動は自身のことを見つめ直し、成長するチャンスです。これまでの私は、自分がやりたいことを気持ちの赴くままに行うだけでした。そのため、客観的に自分自身の性格や長所、短所を捉えたり、やりたいことが自分に合っているかなどを考えたことはありませんでした。

就職活動中、私が他の就活生と同様に最初にぶつかり、なかなか乗り越えられなかった壁が自己分析です。そこで、自己分析ツールや他己分析などを活用した上で、できるだけ多くの人と接するようにしました。私は地図が好きで当初からゼンリンで働きたいという強い気持ちはありました。しかし、あえて合同説明会等で少しでも興味をもった他企業の個別説明会や、インターンシップに参加するようにしました。様々な業種や他大学の学生と接することで、客観的に自身の長所や短所が見え、視野を広げることもできました。

就職活動では、知っている企業だけを見るのではなく、様々な業種に目を向け、足を踏み入れてほしいと思います。短期間で多くの人と接することは、自分を成長させるチャンスです。

福山市役所に内定

公共マネジメント学科4年 奈良木 暉
(広島県立府中高等学校出身)

私が就職活動をする上で大切だったことは、最初から就職活動の選択肢を狭めないということです。

私は、大学3年生の夏までは何となく地元の市役所で公務員として働きたいと考えていました。そのため、夏休みは下関市役所のインターンシップに参加し、公務員としての仕事を実際に肌で体感してきました。実際にインターンシップに参加してみると、自分が今までイメージしていた通りの仕事やそうでない仕事もあり非常に勉強になりました。そこで、私は本当にこのまま公務員を目指しても大丈夫なのかと考えるようになり、民間企業についても説明会に参加するなどしてしっかりと調べていくようになりました。公務員、民間企業の両方をしっかりと見た上で自分の将来の仕事を決めることができたので本当に納得した就職活動ができたと考えています。

これから就職活動をしていく皆さんには、将来の夢をはっきりと持たれている方やそうでない方もいると思います。本当に納得できる就職活動を行うためにも、まずは幅広い分野の職業をみて最初から自分の選択肢を狭めないようにすることが大事だと思います。就職活動は大変だと思いますが、たまには息抜きをしながら頑張ってください。

就 職 支 援

多様化するインターンシップ

准教授 秋山 淳
(キャリア委員会副委員長)



昨年に続いて民間企業の新卒採用予定者数は昨年度より増える見込みで、就職状況は売り手市場と言えるでしょう。このような状況下、インターンシップを開催する企業の数も増加する傾向にあり、企業としてもインターンシップを通して会社に合う優秀な学生の獲得を図っております。

本学でも大学主催のインターンシップに多数の学生が参加しており、今年度は全体として53の企業・団体に77名の学生を派遣することができました。学生の就業力に対する意識の高まりと、関係各位の協力を得たおかげで、派遣企業・団体数、派遣学生数ともに最も多い数となりました。海外でのインターンシップとしては中国(青島)へ2名、シンガポールへ11名、韓国(釜山)へ4名の学生を派遣しました。その他にも、学生自らが就職情報サイトを利用して、インターンシップに参加しています。また、1dayの講座形式のインターンシップも増加傾向にあり、その開催時期や形式は年々多様化しております。

本学としては、変わり続ける就職活動に対応し、インターンシップの更なる充実・質的改善を行っていきたくと考えています。

下関市役所のインターンシップを体験して

経済学科3年 稲垣 仁人
(岡山県立津山高等学校出身)

私は夏季休暇中を利用し、下関市産業振興部のインターンシップに参加しました。今回このインターンシップに参加した理由は、地方公務員として働きたいという目標のためです。市役所で行っている業務を実際に体験することで、公務員という仕事に対しての理解を深め、今後の就職活動にも生かしたいと考え、参加を決意しました。

市役所というと、書類を作成したり、窓口業務を行ったりというイメージを持っていましたが、今回体験した産業振興部は庁舎外へ出向く仕事も多く、5日間の日程のうち、ほとんどは外での活動となりました。市主催のイベントのお手伝いをしたり、商店街の空き店舗調査を行ったりと、普段できないような貴重な体験を行うことができました。職員の方とお話できる機会も多く、より深く公務員について知ることができました。

今回のインターンシップで、公務員を目指す上で何が大切なのかということを知り、改めて自分を見つめ直すきっかけにもなりました。今後の就職活動に向けて、この経験を生かしていきたいと思っています。



海外インターンシップに参加して

国際商学科3年 織野 奈津美
(野田学園高等学校出身)

今回、私は青島のトライアルカンパニーのインターンシップに5日間参加しました。私がこのインターンシップに参加した目的は、トライアルが他社より安く商品を提供するためにどのような企業努力をしているのかを知るとともに、中国語のスキルを上げることでした。

5日間のインターンシップを通じて、トライアルがどのような企業努力をしているのかや日本と中国のスーパーの違いについて理解を深めることができたと感じています。私は、青島ではどのような業務が行われているのか全然イメージできませんでした。しかし、青島では売上予測や店舗分析などを行っていることを知りました。社員の方から様々なお話を伺う中でいかに自分の仕事に誇りを持っているのか、海外で働く魅力を感じることができました。

今回のインターンシップに参加することで、自分の長所と短所を明確にすることができました。そして、自分の語学力不足を痛感しました。残りの学生生活では短所を改善し、長所を伸ばしていきたいと思っています。また、語学力を更に高めていこうと思います。



広島市役所のインターンシップを体験して

公共マネジメント学科3年 池田 実優
(広島県立府中高等学校出身)

私は広島市役所都市整備部のインターンシップに5日間参加しました。都市整備は、土砂災害のリスクが高い今の広島市にとって一番重要なことだと考え、市役所としてはどのような視点で土砂災害の対処を行っているのかを学びたいと思い、今回のインターンシップに参加しました。

「復興」と聞くと復旧工事といったハード面の事業の印象が強いですが、広島市役所の被災地復興のための業務としては、土木・建築中心の公共事業だけでなく、被災地の方のカウンセリングやウェブによる迅速な防災情報の提供といったソフト面の業務にも積極的に取り組まれているということを現地視察の中で学びました。

私はこの5日間、職員の方にも注目していましたが、業務での市民の方に対する配慮や、迅速な行動を必要とする姿勢を感じました。そして、どの職員の方も公務員としての仕事に誇りをもって働かれています。このインターンシップでは、公務員の仕事に対して一層興味が深まる貴重な体験ができました。将来、私も公務員として市民の方のために携わることのできる一人になりたいと思いました。



国際交流

留学を通して学んだこと

国際商学科4年 小中 悠平
(山口県立豊浦高等学校出身)

私は2017年8月から2018年5月までの約10か月間、アメリカのロス・メダノス・カレッジに派遣留学をしました。きっかけとして、ある教授から大学に留学制度があることを教えてもらい、強く勧められたことがあげられます。留学前の私の語学力は本当に目を背けるほど酷く、留学する資格が無い程低かったことを覚えています。

留学開始から3か月間は現地でできた友達や教授、ホストファミリーが何を言っているのか全く理解できず、また全く会話することもできませんでした。しかし、3か月を過ぎた辺りから徐々に相手の言っていることが理解できるようになり、会話のほうも徐々にゆっくりとできるようになりました。また、現地の友達やホストファミリーは非常に親切で渡米中様々な場所や体験をさせてくれました。

そのおかげで私の語学力は飛躍的に向上し、様々な知識も得ることができたと感じています。

私は長期留学することは単に語学力の向上だけでなく実際に肌で感じる、体験することで得られる経験こそが最も価値のあること、何事にも代えられないことだと実際に留学を経験して強く感じました。



トルコ留学を経験して

国際商学科3年 宮邊 結菜
(大分県立大分舞鶴高等学校出身)

私は約10か月間トルコ共和国にあるボアジチ大学に留学しました。中学生のころからずっと留学を希望していたので、留学が決まった時は本当に嬉しかったことを覚えています。日本では留学というとアメリカやイギリス、オーストラリアなどの英語圏へ語学留学をするのが一般的です。しかし私はあまり多くの人が留学先として選ばず、自分が知らない文化が存在し、学習したことのない言語が飛び交う環境で生活したいと強く思いトルコへの留学を希望しました。派遣先の大学はトルコで一番レベルの高い大学であったので、語学力はもちろん、授業内容を理解することに苦労しました。しかし、自ら教授や学生に積極的に話しかけて質問をしたり、一緒に課題やプレゼンテーションを行ったりすることで乗り越えました。留学中は慣れない英語やトルコ語での生活、また、文化の違い等で苦労することもたくさんありましたが、それ以上に、その都度、周りの暖かい人達に助けてもらったことが印象に残っています。留学を終えた今、残りの大学生活だけでなく社会人になってもこの経験を生かしたいと思います。



一歩踏み出す勇気

国際商学科3年 岡田 馨太
(九州国際大学付属高等学校出身)

私は、約1年間ドイツのルートヴィヒスハーフェン経済大学に留学をしました。ドイツでの留学中に一つ心がけていたことがあります。それは、「一歩前へ踏み出す」ということです。折角ドイツに来ているのに殻に籠っていても勿体ないと思い、積極的に英語やドイツ語を話す機会を設けるようにしました。例えば、他大学の「日本語を話す会」に参加してみたり、他国からの留学生と一緒にスポーツクラブに参加するなど、自発的に人と関わるという心がけを1年間貫いた結果、語学力向上だけでなく、交流関係も大きく広がりました。クリスマスマーケットに誘ってくれる友人、花見に誘ってくれる友人、ワールドカップ観戦に誘ってくれる友人。このドイツでの1年間は本当に友達に恵まれたと自負しています。

もし、今あなたが留学に行くかどうか迷っているなら、一歩踏み出して留学に行くべきだと思います。勿論そのためには大金がかかりますが、留学での1年は君にとってかけがえのない1年になると思います。是非そのチャンスを逃さず、掴み取ってほしいと思います。



第二の故郷・台湾

国際商学科3年 山西 あみ
(徳島県立脇町高等学校出身)

私は2017年9月からの1年間、台湾の桃園市にある銘傳大学に留学しました。海外での生活ということで期待もありましたが、下関市立大学からの初めての交換留学生ということで不安も大きかったです。しかし、銘傳大学では応用日本語学科に所属したことで、日本語が通じる環境で少しずつ現地に慣れていけたため、その不安もすぐに解消されました。台湾では勉強は勿論、事あるごとに現地の友人たちに付いて行動し、積極的に学校外の人たちとも関わるようにしました。2月にあった冬休みには1か月間、何人かの友人の家へとお邪魔し、ホームステイ体験もしました。お邪魔したどのご家庭も「ここを台湾の実家だと思って」と本当の家族のように接してくれました。それにより、台湾の一般家庭の生活や習慣、正月の過ごし方を体験でき、冬休み明けには中国語のスキルも格段に上がりました。このように「またいつでも帰っておいで」と言ってもらえる場所ができたことが留学で得たもののなかで最も大きいように思います。



国際交流

派遣留学を振り返って

国際商学科4年 飛永 百華
(長崎県立長崎北陽台高等学校出身)

クイーンズランド大学(ブリスベン・オーストラリア)に1年間留学しました。キャンパスがとて広く、設備が整っている大学でした。学内には、24時間開放している大きな図書館やカフェがたくさんあり、定期試験前には歯ブラシなどを持参して図書館に2、3泊して勉強しました。日本ではそのようなことができる学校や施設も少ないので良い経験になりました。

前期では教養、後期では経済学を履修し、無事単位を取ることができました。日本とは全く異なる授業形式に慣れることが難しかったです。経済学では、授業内容が難しく、課題の量も格段に増えたため、毎日図書館にこもって必死で勉強しました。

最初は、自分の英語力の上達ばかりに気をとられていましたが、目の前の課題に向き合っているうちに英語力が大きく伸びていることに気がきました。交友関係においても、当初は友達を作ろうと必死になっていましたが、学校生活やサークル活動を楽しんでいるうちに、気が付くと自然と友達に囲まれていました。

留学では、悩んだり、嫌な思いをしたり、楽しかったり、本当に色んなことがあり、その時は目の前の問題で手一杯でしたが、こうして振り返ると、全ての経験が本当に貴重に感じられます。英語力の向上を目指して始めた留学で、それ以上のものをたくさん得ることができました。



外国研修(韓国)に参加して

国際商学科3年 山本 さくら
(大分県立大分鶴崎高等学校出身)

私は韓国の釜山にある東義大学校での語学研修に2週間参加しました。私のクラスでは、多くが韓国語で授業をするのでついていくのが大変で、おまけに周りの学生らは聞き取りも勿論、話せる学生が多くて最初は内心気持ちが後ろ向きになりかけました。しかし、授業の後の自由時間の時に気持ちが前向きになるきっかけがありました。自由時間は友達とチューターら5、6人で行動することが多かったのですが、日本語が出来ない韓国人のチューターさんは私に伝えたいことがあるとゆっくり身振り手振りを使って必死にコミュニケーションを取ろうとしてくれました。そのことで嬉しい気持ちと申し訳ない気持ちでもっと韓国語ができた、と悔しい気持ちになり、もっと話したい、もっと頑張ろうと、後ろ向きになりかけていた気持ちが前向きになりました。

この2週間韓国で過ごして、以前に比べて韓国語が少し上達したと思います。そして釜山の観光名所、ショッピング、カフェ巡りなど遊びもフルで楽しめたメリハリのある時間を過ごせました。帰ってからも今回感じたこの気持ちをずっと大切に、これからも努力していきます。



外国研修(カナダ)に参加して

国際商学科3年 岡野 彩美
(山口県立下関南高等学校出身)

この度の研修は、私の生涯の中で、初めてカナダの地に足をつけた瞬間でした。3週間、バンクーバー島の「ヴィクトリア」という英国情緒あふれる都市でホームステイをし、語学学校に通いました。ヴィクトリアは英国と似た文化や習慣がありましたが、英国とはまた違った良さもあり、街に花や緑が多く、街全体が落ち着いており、ゆったりと過ごすことができました。ひとりでバンクーバーにも訪れましたが、そこではヴィクトリアとは全く異なる独自の文化と景色に触れることができました。ホームステイでは、メキシコとブラジルの留学生もおり、毎日一緒にご飯を食べたり、ホストファミリーと出かけたりし、カナダ以外の文化についても知ることができました。カナダでの生活は、毎日心が温かく満たされていました。とにかく刺激的な毎日で、忘れられない思い出となりました。この経験を糧に、今後も精進して参りたいと思います。



外国研修(台湾)に参加して

公共マネジメント学科3年 神津 拓希
(長野県岩村田高等学校出身)

私は9月8日～22日までの2週間、台湾・台北市の銘傳大学での外国研修に参加しました。外国研修は今回で2回目であり、去年は青島大学でした。久しぶりの中国語学習でもあったため、忘れていたところも多くありましたが、少しずつ思い出しながら、授業を受けました。午前中に1回50分の授業を3回受け、午後はフリータイムで観光などを楽しみました。また銘傳大学の桃園キャンパスを訪れ、日本語学科生の皆さんに案内してもらい、キャンパス内を見学したり、食堂で昼食を買って一緒に食べたりしました。そのあとは、発表会や交流も行いました。観光では、故宮博物院や台北101、十分、九份といった有名な観光地にも行きました。また、私は台湾の鉄道に関心を持っていたので、かなり大きい書店で台湾の鉄道について書かれた本を5冊ほど購入したり、台北駅や列車の写真を撮影したり、台湾メーカーの鉄道模型を購入して、満喫しました。今回の研修で、台湾の文化、現地の方々の暖かさに触れることができました。2週間では足りないほど充実した研修でした。また台湾に行きたいので、中国語をしっかりと学習し、普通に日常会話ができるレベルまで上げていきます。



下 関 市 立 大 学 News & Topics

オープンキャンパスを終えて

生協学生委員会委員長 公共マネジメント学科2年

私たち生協学生委員は「組合員の生活をより良くする」という想いのもと活動している組織です。オープンキャンパスでは、未来の組合員になるかもしれない人たち(高校生)に下関市立大学の魅力を伝え、入学した際は安心して大学生活の準備ができるように努力してきました。

今回のオープンキャンパスは特に、来学者と私たち大学生の距離が近いように感じました。その中で参加された方の質問に笑顔で受け答えし、必要なことを自ら探し出して、積極的に行動している1,2年生がとても印象的でした。また、このオープンキャンパスは学生委員が入れ替わって初めての大きな行事で、私も1,2年生も不安だったと思います。しかし、学生委員が主体的に動く姿を見せることによって、大学進学を目指す参加者の皆さんが少しでも大学生活のイメージを膨らませることができていたら、私は嬉しいです。

オープンキャンパスは大学行事の運営というだけではなく、多くの方々のご協力で私たち自身が成長できる良い機会です。この経験を生かして今後の活動も頑張っていこうと思います。



2018年度関門地域共同研究会・成果報告会レポート

准教授 佐藤 隆

(附属地域共創センター地域調査研究部門長)

この研究成果報告会は学術的研究成果を踏まえて、今後の両市関門地域の政策推進に役立つことを目的としたものです。7月13日(金)、海峡メッセ下関801大会議室において、下関市立大学と北九州市立大学の関係者、下関市と北九州市の市役所職員あわせて40人余りが参加し、盛況でした。

第1部の関門地域共同研究会は、本学の杉浦准教授から「産業構造の変化と人口増減の関係について～関門地域を事例として～」に関して大変興味深い報告がありました。北九州市立大学側からは「人口減少下における公共施設マネジメントのあり方について～先進事例からの示唆～」と「子どもの社会的排除に対する地方都市における取組み」の報告がありました。

第2部のシンポジウムのテーマは「健康長寿と食生活のあり方」に関して、大変興味深い討論が行われました。最初に東京都健康長寿医療センター研究所の横山友里氏から基調講演が行われ、それをもとにパネルディスカッションが行われました。要点としては以下の通りです。健康長寿を実現するうえで日々の食事は重要な役割を担っており、各ライフステージに応じて食事の量や質を工夫することが必要です。特に、日々の食事の中で多様な食品を摂取していくことが高齢期の筋肉量や体力の低下を抑制し、健康長寿を実現するために重要です。今後、地域ぐるみの健康寿命の延伸にむけた健康づくりや食育が推進されることが期待されます。

下関くじらサマースクールを開催しました!!

本学が誇る「鯨資料室」の資料や資源を生かした地域貢献の一環として、附属地域共創センター主催の「下関くじらサマースクール」を、平成30年7月28日(土)と8月11日(土・祝日)の2回開催いたしました。このサマースクールには、下関市内在住の小学生16名と保護者等12名の参加があり、キャンパスは元気なちびっ子たちの賑やかな声に包まれました。

講義は、最初の下関鯨類研究室長の石川創氏より「クジラってどんな生き物?」が、続いて本学委嘱研究員の岸本充弘氏より「下関とくじらの歴史について」のお話があり、実物のくじらの歯やヒゲに触って、参加された皆様が非常に興味を持っていた内容となりました。お話の後は、本館Ⅱ棟にある鯨資料室や、学術センター1階にあるイワシ鯨頭骨や捕鯨母船模型の見学も行いました。

最後に、地域共創センター長の濱田教授から参加者1人ずつ修了証書を受け取りましたが、自由研究の課題が1つ片付いた安堵感からか、お子様も保護者の皆様方も終始笑顔だったのが印象的でした。



春学期卒業証書・学位記授与式

9月30日(日)、平成30年度春学期卒業証書・学位記授与式が挙行され、今年度は、経済学科12名、国際商学科8名の計20名が本学を巣立っていきました。学長は告辞の中で、「大学時代にいくつかの支えとなる言葉に出会った方もおられると思います。皆さんは、社会に出れば多くの困難に対し、大学生活で得た知恵と知識、経験を活かしながらいち立ち向かい、自分の手で自らの人生を切り開いて行かなければなりません。その際、いくつかの心に残る言葉を支えにしながら社会人としての歩みをはじめ、困難な時代を力強く生き抜いてほしいと願う。」と述べました。本学は、全国各地あるいは世界で活躍する皆さんを、下関から応援しています。

平成30年度防災訓練の実施について

9月21日(金)に、学生、教職員及び地域住民の約150名が参加し、防災訓練を実施しました。訓練には、地元大学町自治会の住民の方と、初めて生野町自治会の住民の方も参加されました。消防署員からは、下関は比較的災害が少ない地域ですが、沿岸部は南海トラフ地震による津波に襲われる可能性があります。日頃から災害発生時にどのような行動をし、どんな施設が利用できるのか知っておくようにしてください、との指導がありました。



下 関 市 立 大 学 News & Topics

『世界の厨房から』を終えて

国際商学科3年 進 美彩登
(福岡県立戸畑高等学校出身)

今回、7月9日(月)に厚生会館3階ホールで『世界の厨房から』を開催しました。このイベントは『国際交流会ともだち』のメンバーと留学生と一緒に各国の料理を作り、来場者の方々に振舞うというものです。今回は韓国、中国、台湾、ベトナム、トルコ、マレーシアの6か国の留学生に参加していただきました。各国のグループごとに料理を決め、試作を行い、本番当日も留学生の皆さんと楽しく料理を行いました。今年はテレビ取材も行われ、国際交流会ともだちのメンバーも緊張していましたが、このように下関市立大学の国際交流の活動が多くの方々に知っていただけるいい機会になりました。多くの方々にお越しいただき、「とてもおいしかった」と声をかけていただきとても嬉しかったです。また、当日には日本舞踊サークルさくら会の皆さんに日本舞踊を披露していただき、日本の伝統文化も楽しめるイベントになったと思います。

来年も『世界の厨房から』を行う予定です。今年以上に多くの留学生に参加していただき、より交流が深められるイベントになればと思います。



日本にしながら世界を知ろう!!で発表して

国際商学科1年 イムラン アリ
(パキスタン・ラホール出身)

日本に来てから2年が経ち、この間に日本の文化、日本人の考え方などについて多くの知識を得てきました。その中で日本人のパキスタンに対する知識の程度は少しは分かってきたのですが、いまだに知られていない方だと思います。自己紹介に「パキスタンから来ています。」という台詞に対して返ってくる答えは殆ど「へえ〜パキスタン! そうなんだ! 国名ぐらいしか知らないけど、面白いね!」です。せっかく自分が日本に来て日本について学んでいるので、自分の国についても広く知ってもらいたいと思います。母国にはいまだに、悪い習慣が多くあります。もちろん、いい習慣と文化もあります。日本も素晴らしい国ですが、完璧ではないです。お互いに知識を交換し合い、悪いところを改善できるのではないかと私は思います。今回、私は本学で自分の国について話す機会を与えられ、お陰で少しは母国のことを知ってもらえたと思います。本発表でパキスタンの歴史、食べ物、習慣、お祭り、衣服と観光地について話し、興味を持っていただきました。機会があれば実際に行ってみたいですね。



日本文化の神髄を知ろう!!

〜おふくろの味から学ぶ日本文化〜に参加して

経済学科1年 毛 子奇
(中国・上海市出身)

今回は宝町自治会の婦人会の方々に日本の家庭料理の作り方を教わるというイベントに参加いただき、大変楽しかったです。日本人の家庭料理というと、お母さんが毎日準備してくれるお味噌汁、温かいご飯、焼き魚などをイメージするでしょう。今回、家庭的な日本料理が味わえるので、とても楽しみでした。私は、いろいろな日本料理の作り方を知っています。お味噌汁とおにぎりを例にすれば、作り方がそんなに難しくなく、半分以上の日本人は毎日食べています。しかも、平安時代においてはおにぎり、奈良時代においては味噌汁の歴史についても記載されています。私は、そのように厚みのある歴史が含まれている食文化が大好きです。

日本料理は日本文化と言っても構わないでしょう。その神髄とは、人の感情だと思います。私たちが食べ物を食べるのは空腹を満たすだけではなく、土地の感情、物の感情、人の感情を消化しています。よく異郷の遊子を耳にして、同じものを食べて、お母さんの味があると感じて、とても感動しました。食べたこの味は、単純な食事をした後の甘いとか塩辛いとかではなく、彼が食べたのは記憶の中のお母さんの愛ではないでしょうか。



サークル・日本遺産探Q会の地域づくり活動

教授 水谷 利亮

日本遺産探Q会は、共同自主研究から発展したサークルで、日本遺産の認知度向上を目的にしています。主に「関門」ノスタルジック「海峡〜時の停車場、近代化の記憶〜」の調査・研究に取り組み、その魅力を発信すべくフィールドワークやイベント参加、パンフレット作成などを行っています。モットーは、「真剣に遊べ。大学在学中にしかできないことを全力でする!」。

2017年度は、下関市内の日本遺産を調査して整理し、江戸時代から現在までの地形・地図の変遷や構成文化財の歴史を学べるパンフレット「下関“成長”物語Vol.1」を作成しました。2018年度前半は、構成文化財の六連島灯台がある下関市の六連島において、下関市教育委員会文化財保護課の職員の支援も得ながら、島の自治会の皆さんと一緒に島の地域資源について調査し、その内容を「下関“成長”物語Vol.2〜六連島の魅力を伝えたい!大学生から見た、島の良いところ〜」にまとめました。

これからも、自分たちも楽しみながら日本遺産の魅力を多くの方々に伝えていきます。

サークルのホームページ
(<https://shidai-nikkyu.amebaownd.com/>)もご覧ください。



平成30年度 春季 大会等成績

サークル名	大会等名称	種目など	成績
硬式庭球部	全日本大学対抗テニス王座中国四国地区大会	男子5部	優勝
フットサル部	2018年全日本大学選手権山口県大会		準優勝
ソフトテニス部	第62回中国学生ソフトテニス優勝大会 // //	男子団体 女子団体 ダブルス 新郷・上門	2部3位 2部3位 ベスト16 (全国大会出場)
陸上競技部	第60回下関市陸上競技選手権大会 // 第45回山口県選手権兼中国5県選手権予選会	男子100m/男子200m 男子5000m 男子100m	1位 石川順典 1位 河村和政 1位 石川順典
ハンドボール部	中四国学生ハンドボール春季リーグ	男子3部	4位
男子バレーボール部	中国大学バレーボール1部リーグ		6位 (1部残留)
卓球部	第69回中国学生卓球選手権秋季大会 //	男子団体2部 女子団体2部	4位 2位
弓道部	第66回全日本学生弓道選手権大会		田多/東
軟式野球部	平成30年度西日本地区学生軟式野球春季1部リーグ		優勝 (全国大会出場)
バドミントン部	第65回北九州・下関地区大学体育大会バドミントン競技春季大会 //	女子団体 女子シングルス	3位 3位 梶原芳美
準硬式野球部	中国地区準硬式野球春季2部リーグ戦		優勝 (1部リーグ昇格)

■ 今年度の入試スケジュール

【推薦入学・特別選抜・第3年次編入学】

試験日	平成30年11月17日(土)
出願期間	(推薦・特別) 平成30年11月1日(木)～11月8日(木) (編入学) 平成30年10月18日(木)～10月25日(木)

【外国人留学生】

試験日	平成30年12月15日(土)
出願期間	平成30年11月22日(木)～11月30日(金)

【一般選抜 (前期日程)】

試験日	平成31年2月25日(月)
出願期間	平成31年1月28日(月)～2月6日(水)

【一般選抜 (公立大学中期日程)】

試験日	平成31年3月8日(金)
出願期間	平成31年1月28日(月)～2月6日(水)

●お知らせ

一般選抜では、地方試験会場を多数設定しています。前期日程では下関・大阪・広島・福岡、公立大学中期日程では下関・名古屋・大阪・広島・高松・福岡・鹿児島で受験することができます。詳しくは、募集要項をご覧ください。

■ 平成30年7月～10月 行事記録

- 7月 9日 世界の厨房から
12日 共同自主研究発表会
13日 関門地域共同研究成果報告会
24日 大学院中間発表会
28日 下関くじらサマースクール
30日 春学期定期試験(～8月3日)
- 8月 4日 オープンキャンパス(～5日)
8日 夏季休業(～9月23日)
11日 下関くじらサマースクール
20日 春学期卒業論文提出締切
共同自主研究報告書提出締切
- 9月 1日 大学院入試(一次募集)
3日 大学コンソーシアム関門(～7日)
14日 公立大学中国四国地区協議会
15日 保護者懇談会
21日 防災訓練、秋学期履修登録開始
24日 秋学期授業開始
30日 春学期卒業式
ミニオープンキャンパス
- 10月 1日 学生健康診断(～2日)
5日 第2回下関フグを活用したイノベーション消費活性化検討委員会
7日 大学祭(～8日)
9日 大学祭片付け(全学休講)
クリーンキャンパスデー
17日 履修登録取消期間(～23日)
20日 市民大学テーマ講座

相原信彦先生及び
米田昇平先生に
名誉教授の称号を
授与しました

平成30年6月21日(木)、本学大会議室において本学名誉教授称号授与式を行い、本年3月31日付で退職された相原信彦氏及び米田昇平氏に名誉教授の称号が授与されました。

長きにわたり本学の教育や運営にご尽力をいただき誠にありがとうございました。

自著を語る

連載企画

持続可能な農山村を構想する—
『農家が消える：自然資源経済論からの提言』

准教授 山川 俊和

このたび、2009年から続く一橋大学・自然資源経済論プロジェクトの成果として、寺西俊一ほか編『農家が消える：自然資源経済論からの提言』(みすず書房)が出版されました。本書のタイトルは、「農家が消える」というインパクトあるものです。このタイトルには、日本における農業、農家、そして暮らしを営む場としての農山村の危機とその克服こそ、今日の重要な政策課題であるとのメッセージが込められています。本書は、I: 歴史的な岐路に立つ農業・農山村、II: 世界のなかの自然資源経済という2部構成をとっています。環境経済学の立場から、農業と農山村の持続可能なあり方を、農業、エネルギー、貿易などの政策と関連付けつつ検討しました。私は、「貿易と経済連携への新視角：東アジア地域との共生へ」(第7章)を担当しました。自然環境の持続可能性を前提としたオルタナティブな貿易論として、とくに、貿易を通じた自然環境負荷や、NAFTA-TPP型経済連携の問題点を詳しく検討しています。ご一読いただければ、嬉しく思います。



自著を語る

連載企画

倫理学基礎講座／
精神の現実性—ヘーゲル研究

教授 桐原 隆弘

このたび、哲学の入門書と専門書の翻訳を担当しました。前者『倫理学基礎講座』(マティアス・ルッツ＝パッハマン著、桐原訳、晃洋書房、2018年)は、原著者によるドイツ・フランクフルト大学での講義「実践哲学入門」を基にした著作です。西洋の倫理思想史を分かりやすく概説したのち、行為、徳、自由／責任などの基本概念の分析を経て、応用倫理学にも説き及んでいます。民主的合意形成の理論として有名な、ハーバーマスなどによる「討議倫理」についての詳細な解説が特徴的です。善・正・正義を軸として徳論、功利主義、義務論を総合する倫理学体系への展望を示す野心作でもあります。

後者『精神の現実性—ヘーゲル研究』(ミハエル・クヴァンテ著、後藤弘志氏、裕智樹氏との共訳、リベルタス出版、2018年)は、ドイツのヘーゲル研究および生命倫理研究の泰斗による、近年のヘーゲル研究の集大成です。私は自然哲学と社会哲学に関する数章を担当しました。ヘーゲルの「全体論的」自然／社会観がいかに現代の「心の哲学」ならびに「コミュニティ論争」に有益な視座を提供してくれるかを、きわめて鮮やかに示しています。

